

(スペシャル・トーク)

英語教育改革と技術移転の問題点

Technology Transferred for ELT Innovations,
Promising?

沖原 勝昭

京都ノートルダム女子大学教授

okihara@notredame.ac.jp

文科省「グローバル化に対応した 英語教育改革実施計画」(H25.12)

- 授業を基本的に英語で進める
- 英語教育推進リーダーの配置
文科省/British CouncilによるLEEP研修
Cascade Project
- CAN-DOリストの作成・実践

行政からの要請に困惑

村田純一KELES会長

「政治の側から無理難題を突きつけられる
のではまともに聞いてられません。」

KELES Newsletter(2015年 第1号)

巻頭言「大転換をすべきこと」

改革は必要か？

- 学校の英語教育への不満・批判
期待値と実態値の乖離＝世界共通

→ 新技術の考案・移転
- 3つの例(OA, CLT, CLIL)は現状への
不満が引き金

ヒトは変われるのか？

「社会変化」(social change)の諸説

(Henrichsen 1989)

1. Equilibrium (現状の平衡状態, 安定志向)
2. Evolutionary (ゆっくり進化)
3. Conflict (弁証法: 対立→葛藤→変質)
4. Rise and Fall (蓄積でなく交代劇, 興亡劇)
5. Diffusion (経験の貸借, 技術の移転)

社会変革の類型図

(Roger and Shoemaker 1971)

新技術 推進 母体	内部・国内	外部・国外
	内部・国内	外部・国外
内部・国内	I. Immanent change	II. Selective contact change
外部・国外	III. Induced immanent change	IV. Directed contact change

社会変革の類型

- I. Immanent change
(自主的・内発的改革)
- II. Selective **contact** change
(内部が外部技術にヒント→自主的**移転**)
- III. Induced immanent change
(外部による問題指摘→内発的改革)
- IV. Directed **contact** change
(外部による外部技術の**移転**)

新技術移転のチェックポイント(II & IV)

起点コンテキスト→移転先コンテキスト

- ユーザー特性: 学習者, 教員
- ユーザーシステム: 教育の形態 (ESL vs. EFL),
社会環境
- 改革推進母体 (change agent):
外部/内部, 専門家/非専門家

教育の形態 & 社会環境

1. EFL vs. ESL

2. TESEP (Tertiary, Secondary, Primary)

＝公教育の英語教育＝消費者

BANA (Britain, Australasia and North America)

＝英語国の民間英語教育＝生産者

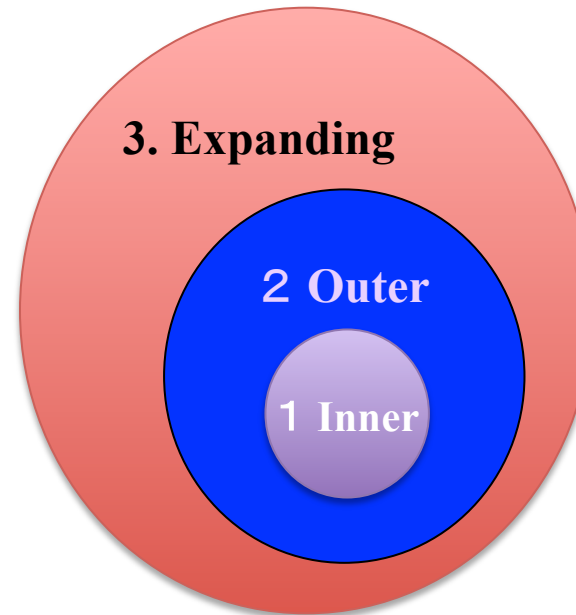
(Holliday 1984)

英語学習環境3つの同心円

(図) 英語学習環境

(Kachru 1986)

1. Inner Circle 内円圏
(ESL in English-mother-tongue countries)
2. Outer Circle 外円圏
(ESL in non-EMT countries)
3. Expanding Circle=EFL 拡大円圏



3つの新技術：移転は**不整合**

(1) Oral Approach (OA): ESL→EFL

成人教育(BANA)→学校教育(TESEP)

(2) Communicative Language Teaching (CLT)

成人教育(BANA)→学校教育(TESEP)

(3) Content and Language Integrated Learning
(CLIL)

European TESEP→Non-European TESEP

Oral Approach: 音声英語への変革

1950～60年代 (IV: Dcc)

Oral Approach (OA)とは？

C.C. Fries and F. Twaddell

Michigan Method, Pattern Practice, Contrast,
行動主義心理学と構造言語学,
戦後ELEC主導, 中学校で実践,
教員研修, 山家保

OAの起点コンテキスト

ユーザー: スペイン語系成人学習者

NS教員

システム: ESL/BANA環境

推進母体: ELEC+ Michigan, ELI

ELECの努力は失敗

Henrichsen (1989)の判定

Diffusion of Innovation in English Language Teaching--The ELEC Effort in Japan 1956-1968.

誤認： 日本の英語教育全体の変革

vs.

入門期の音声的基礎づくり

書評：沖原(1999)
「HenrichsenのELEC研究書の今日的意義」

OA移転の真の仕掛け人

ロックフェラー財団 (David Rockefeller, 3rd)

移転先コンテキストの意図的無視

“Build a better mousetrap, and the world will beat a path to your door.”

財政支援, 実証実験拒否, 首相への直訴

Fries vs. Twaddell確執, ELEC孤立, 凋落

Communication能力養成への変革

1970～80年代

II. Selective contact change

内部が外部技術にヒント

→自主的移転

BANA(民間の教育)

→TESEP(学校教育)

CLTの起点コンテキスト

(Council of Europe)

ユーザー: 成人学習者

システム: 学校外教育, 就職支援,

学習目的 (needs-based)

EUの言語的統一の道具 (language passport)

＞CAN-DOリスト (CEFR)

推進母体: 英語教員, 文科省, British Council

※1996年イギリス文部省通達 (TESEP):

暗記に基づく基礎力の確保

英語による教科指導 (CLIL) への変革

1990s～

IV. Directed contact change

(外部による外部技術の移転)

< 起点コンテキスト (=ヨーロッパ) >

ユーザー: 中等, 大学の学生, 教科担当教師

(英語能力保持者容易に確保)

システム: EFL環境, 学校教育

推進母体: [British Council](#) (東南アジア), 日本?

CLILの定義（元祖ヨーロッパCLIL）

- ①授業用言語は**外国語**であって、
公用語や第二言語ではないこと
- ②CLIL担当教師は**教科専門の教師**であり、
言語教師ではないこと
- ③CLIL担当教師はその外国語の
母語話者ではないこと

CLILの形態

本来的に母語を通した教育が成立している国や社会において、母語以外の言語を授業用言語として使って教科内容を教える教育形態である。

Immersion Program,

Content-based Instruction

とは異なる。(沖原2016)

CLIL考案の契機

EU域内における
現代語教育の**成果への不満**



教室は言語学習に適した環境ではない？

→CLILの導入

→自然な学習 (picking up on the street)

環境の実現 (Dalton-Puffer 2007)

他教科の援助→FL教育の充実, でしょうか？

CLILの実践状況(EU地域)

Council of Europe 主導のもと、かなり定着し、成果も上げているが、正確な状況は不明。

英語CLIL(→CEIL)が一般的
英語による授業に対する苦情も多い。

CLILの移転状況（東南アジア）

タイ：CLILは小学校英語導入の露払い。
British Council支援

2008年English Program（タイ版CLIL）

担当教師確保が困難→外国人への依存

CLILの移転状況

(インドネシア)

2008年, SBI中等学校(理数系科目を英語で教える)発足

2013年, 英語CLILに対する最高裁違憲判決

「母語で教育を受ける権利の侵害」

⇒小学校英語の廃止, 高校の英語時間数削減

(Handisantosa and Coleman 2015)

言語学習の過重負担, 国語への愛着

CLILが提起していること

1. 教育内容の見直し

→文字言語, CALP (Cummins, 1979), 学習言語
(academic language) (ノトラー 後藤, 2011)

⇒音声言語, 音声技能偏重でよいか？

CLILが提起していること

2. 教科間の連携構築の必要性→教科教育学
(例) 学習語彙の指導は教科連携で行う必要あり。
英語の語彙指導における訳語主義の再考。

学習語 (academic word) = 通教科的に使用:
学習項目として語義を教えることは稀である
(例, 意見, 感想, 対比, 分類)

Cf. 専門語 (technical word), 一般語 (general word)

日本のCLIL実践例

スーパーサイエンスハイスクール(SSH):145校

日本版CLILの移転事例として有望

目標のひとつ:国際性を育てるために必要な英語
での理科授業とプレゼンテーション演習

(成功事例)

奈良「PM2.5分析と気候予報」英語でも発表

茨城「酸化と還元の変動反応」アメリカ化学会誌

(科学技術振興機構サイト)

学校英語教育 (TESEP) の使命

目標：一生通じて生きて働く学力の形成＝3 R's,
文字言語への習熟（潜在力）

内容・方法：将来を見越した知識の習得
（Just-in-case Approach）

× すぐに役立つ知識 (Just-in-time Approach)
＝BANA （Mehisto *et al.* 2008）

英語教育改革の適否 自問してみよう

1. グローバル人材とは？必要か？

企業の求める人材の大多数はナショナル人材とローカル人材。グローバル人材は少数のエリートで十分。

文科省：すべての生徒を目標。（寺沢2015）

2. CAN-DOリストをどう活用するのか？

EU統合の道具（＝統一的尺度），行動目標

日本の学校教育の実態に即しているか？

英語教育改革の適否 自問してみよう

3. 授業を基本的に英語で進める？

CLILの影響？

English onlyは徹底されていない？

訳読は悪か？

他国のTESEPはどうか？

音声偏重になっていないか？

引用文献 1

- バトラー後藤裕子(2011).『学習言語とは何か—教科学習に必要な言語能力』三省堂.
- Coxhead, A. (2000). New Academic Word List. *TESOL Quarterly*, 34, 2, 213-238.
- Coyle, Do, Philip Hood and David Marsh (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cummins, J. (1979). Cognitive/academic language proficiency, linguistic interdependence, the optimum age question and some other matters. *Working Papers on Bilingualism*, No. 19, 121-129.
- Dalton-Puffer, Christiane (2007). *Discourse in Content and Language Integrated Learning (CLIL) Classrooms*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Dalton-Puffer, C., Nikura, T. and U. Smit (eds.)(2010). *Language Use and Language Learning in CLIL Classrooms*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Handisantosa, Nilawati and Coleman, Hywel (2015). Why did Indonesia's Constitutional Court Ban CLIL? (第50回 RELC International Conferenceでの口頭発表, 2015年3月16日, シンガポール)
- Henrichsen, L.E. (1989). Diffusion of Innovation in English Language Teaching—The ELEC Effort in Japan, 1956-1968—.

引用文献 2

- Holliday, A. (1994). *Appropriate Methodology and Social Context*. Cambridge University Press.
- 科学技術振興機構, スーパーサイエンスハイスクール. <https://ssh.jst.go.jp/>.
- Kachru, B.B.(1986). *The Alchemy of English*. Urbana: University of Illinois Press.
- Mehisto, Peeter, David Marsh and Maria Jesus Frigols (2008). *Uncovering CLIL: Content and Language Integrated Learning in Bilingual and Multilingual Education*. Oxford: Macmillan Education.
- 沖原勝昭(1999)「HenrichsenのELEC研究書の今日的意義」『英語展望』No. 106, Summer, 34-38.
- 沖原勝昭(2016)「英語教育改革におけるCLILの役割」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』No. 46. (印刷中)
- Roger, E.M. and Shoemaker, F.F. (1971). *Communication of Innovations: A Cross-Cultural Approach*. New York: The Free Press.
- 寺沢拓敬(2015)「英語教育学における「グローバリズム」理解の問題点」第41回全国英語教育学会熊本研究大会自由発表資料.